立命館地理学　第30号（2018）15-29

20世紀初頭のカナダ西岸における日本人による漁村開拓

―バンクーバー島西岸のユクルーレットを中心に―

河　原　典　史*

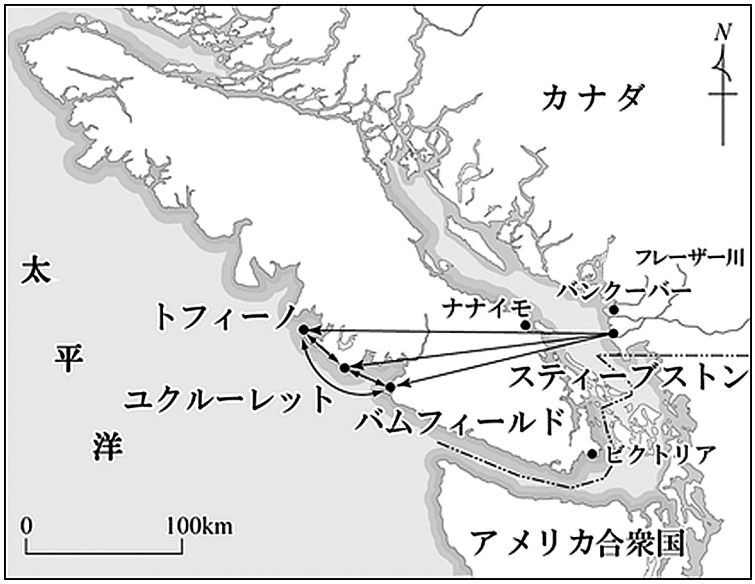
Ⅰ．はじめに

19世紀後半、カナダ西岸ではサケ缶詰産業が成長した。19世紀初頭にイギリスで缶詰が発明され、おもに軍用食として活用された。サケ缶詰は、アメリカ合衆国の南北戦争後に非常食として一般に普及するようになった。とりわけ、軍用食としての動物性タンパク質の採取にあたって、イワシやマグロなどの魚類缶詰は重要であった。産卵時に河川を遡上する母川回帰という本能のあるサケは、比較的に漁獲しやすく、缶詰材料に適していた。そして、低温を好むサケは高緯度に河口を有する河川に多く遡上する。そのため、ブリティッシュ・コロンビア州（以下、BC州）のナース川やスキーナ川などの河口部にサケ缶詰工場（キャナリー）が建設された。特に、フレーザー川河口のスティーブストンには、多くの工場が連立した。同地は、カナダ西岸の開発拠点として発達したバンクーバーの南郊に位置していたからである。

このようなカナダのサケ缶詰産業史について、多くの研究が蓄積されてきた[1)]。スティーブストンをはじめとするカナダ西岸へは、和歌山県日高郡三尾村（現在の和歌山県日高郡美浜町）を中心に多くの日本人が出稼・移住した。そのため、日本でも新保[2)]、佐々木[3)]や山田[4)]など多くの研究がなされてきた。そこでは、現地資本のサケ缶詰工場における階層的な雇用形態が説明されてきた。近年には、Yesaki[5)]のように自らのルーツを元にした日系カナダ人の研究者が現れている。

それらの日本人漁業移民史の先行研究に対して、筆者はスティーブストンにおけるサケ刺網漁業者の漁場利用[6)]、大縮尺図である*Fire Insurance Plan*（火災保険図）を活用したサケ缶詰工場施設内における雇用者の民族別の住み分け[7)]や、英語を理解する日本人先住者によるサケ集配者の存在[8)]などを明らかにしてきた。合わせて、等閑視されてきたサケ刺網業以外の漁業種類、スティーブストンからの季節的移動についても考察してきた。具体的にはハイダ・グワイ[9)]（旧称クィーン・シャーロット諸島）の捕鯨業において、日本人が鯨油採取に重要な役割を果たしてきたことを説明した。ここでもサケ缶詰産業と同様、

* 立命館大学文学部
キーワード：カナダ、日本人、漁村開拓、移住、社会的分業
Key words：Canada, Japanese, Fishing Village Settlement, Migration, Social Division of Labor



第１図　スティーブストンからバンクーバー島西岸への移住

日本人漁業者は現地における民族別の社会・経済的な分業システムに組み込まれていた[10]。また、ニシンについてはサケと異なる漁場利用の特徴[11]や、漁獲・加工後に塩ニシンが日本、一部は中国や朝鮮に転送されたことも明らかになった[12]。

さらに筆者は、カナダ本土の西方に位置するバンクーバー島西岸における漁場の発見と、スティーブストンからの日本人漁業者の移住についても論じた（第１図）。トフィーノとバムフィールドへの移住者は、必ずしも集落の縁辺部に排他的に居住したのではなかった[13]。これらの事例を報告するなかで、貴重な一次資料の発見とその精査[14]によって、新たな史実が明らかになった。資料の活用によって、ユクルーレットについては漁業史研究において見逃されてきた女性や子供たちの活動を紹介した[15]。それらをふまえ、本稿ではスティーブストンからバンクーバー島西岸への二次的移住の要因と、その具体的な居住パターンについて深化した考察を行いたい。

II．バンクーバー島西岸への日本人漁業者の移住

1．漁場の発見

1910年代後半、スティーブストンのサケ缶詰産業は不景気を迎えていた。1913年、フレーザー川上流のヘルス・ゲート渓谷におけるカナダ太平洋鉄道（Canadian Pacific Railway）の工事によって、サケの遡上量が減少した。この環境変化により、それまでの周期的な豊漁とそれにあわせたサケ缶詰工場における設備の拡充、とくに日本人漁業者の雇用に関する計画的な生産システムが大きく崩れた。それによってスティーブストンでは、缶詰工場のストライキが多発した[16]。

何よりも、スティーブストンの人々を悩ま

せたのは、1918 年 5 月 14 日午前 7 時に起こった大火であった。スター・キャナリーの中国人居住区[17] からの出火は偏西風にあおられ、隣接の工場を延焼した。この火災について、日本語新聞『大陸日報』[18] は次のように伝えている（適宜句読点やルビを施し、現代仮名づかいに改めた）。

【資料 1】

〈須知武士道（スティーブストン）漁村の大火　商業区域殆ど全部を焼尽す　同胞類焼家屋は約 150 戸　総損害は百数 10 万ドルに達す〉

本朝 8 時半、スティーブストン、スター・キャナリー黒山氏住居付近より出火（火元は支那人（ママ）ハウスなり）。折柄西風激しく、一方ロンドン・ホテルに燃え移り、他方スター・キャナリーに延焼し火は二手に分かれ、一手は川に沿ってスター、スティーブストン、ライトハウスの各キャナリーを焼き、（中略）その他三キャナリー付属漁夫住宅のことごとくを灰燼（かいじん）に帰し、ようや 12 時鎮火するに至れり。かくのごとくして、スティーブストン商業区域はほとんど全部烏有（うゆう）に帰せる次第なるが、その原因は折柄西風強烈なりしことに、防火水不足なりし事明らかなる。（後略）

さらに、この火災から快復されていない 10 月、いわゆるスペイン風邪が当地を襲った[19]。このようななか、アメリカ合衆国コロンビア州から動力漁船の技術が伝わり、やがてスティーブストンでも漁船の動力化がみられた。造船業の需要に鑑み、和歌山県南部から船大工の呼び寄せが多くなった[20]。この動力漁船の普及によって、日本人漁業者によるバンクーバー島西岸の開拓が行われたのである。

これについては、いくつかの記録があり、その 1 つは『須知武士道漁者慈善団体三十五年史』[21] に収められている。これによると、スティーブストンにおける三尾村出身の磯崎安松がバンクーバー島西岸沖にドッグ種（シロザケ）の漁場を発見したという。当時、荒海と恐れられ、カヌーによるファーストネーションのサケ漁に留まっていた西海岸での漁撈に彼は挑んだ。スティーブストンを 1917 年 2 月に発って、トフィーノに着いた彼は、白人漁業者からすでに漁期が過ぎていたことを聞き、ここに留まった。彼の成功により、翌 18 年には 30 ～ 40 名、19 年には 200 ～ 300 人の日本人漁業者がバンクーバー島西岸へ押し寄せたという。

もう 1 つは、開拓者の 1 人である和歌山県東牟婁郡西向村古田（現在の和歌山県串本町）出身の前川勘三の長男・佐一郎による手記[22] である。佐一郎への聞き取り調査も含めると、日本人による漁場発見は次のようになる。1919 年、ビクトリアに在住していた三尾村出身の上出邦蔵がバンクーバー島西岸の沖合に漁場を発見した。彼がスティーブストンに住む従兄弟の上山又吉にこの存在を知らせると、上山は単身ユクルーレットへ渡り、看過されていたスプリング種（キングサーモン）のサケを一本釣漁業（Hand Line）によって釣獲したという。

いずれにせよ、20 世紀初頭のバンクーバー島西岸における漁業では、ファーストネーションによる自給的なものが中心であり、日本人漁業者はもちろん、白人もほとんど漁業には携わってはいなかった。そのようななか、スティーブストンでの日本人漁業者の中心であった三尾村出身者は、同地の新しい漁場の

存在をファーストネーションから聞き及び、その沿岸の開拓を試みたことは共通している。動力漁船の普及だけでなく、カナダ太平洋鉄道の工事による不漁、火災や病災も重なったことが、バンクーバー島西岸へ日本人漁業者の移住の大きな要因になったのである。

2. 出身地による住み分け

佐一郎の手記は、漁場の発見後についても詳しい。それによると、初年における上山又吉の越冬のあと、彼と共に同郷の田並兼吉や前川勘三らが西岸の様子を調べたという。バンクーバー島、特にユクルーレットへの移住時の様子は、次のようである。

【資料 2】[23)]

白人家族は、ユクルーレットの中央部に僅か一五軒しかなかった。この内（うち）、漁夫は五人しかいなかつた。白人間に排日の気はいは、曇々として漂っていたことは明らかであった。日系人が移住する以前に、白人経営のニュー・イングランド会社が無限のサモン（サーモン）の群れを見て、大規模な市場を建設して大勢の漁夫等の到来を待った。処（ところ）が、太平洋の荒波を恐れた白人等は、僅か五人しか来なかった。その上、大した漁師ではなかったので、会社は勘定に合わず、翌年この新築の市場を放棄して去った。ここへ、日系人の仲買人が来たので、白人漁夫達は助かつたのである。故に、排日の気分はあっても露骨に表わさなかった。

このように、日本人の移住を歓迎する雰囲気もあったなか、開拓の状況は以下のように描かれている。

【資料 3】

ユクルーレットには電燈も水道もなかった。燈火は石油ランプで、飲み水は井戸から取った。正に、現代文明からかけはなれた片田舎であった。子供達にとっては遊び場所もなく、実にさびれたところであった。皆が互いに助け合いながら、山を開いて住宅を建てたのである。あの当時の一世達の一致協力した開拓精神には、感服せざるを得なかった。

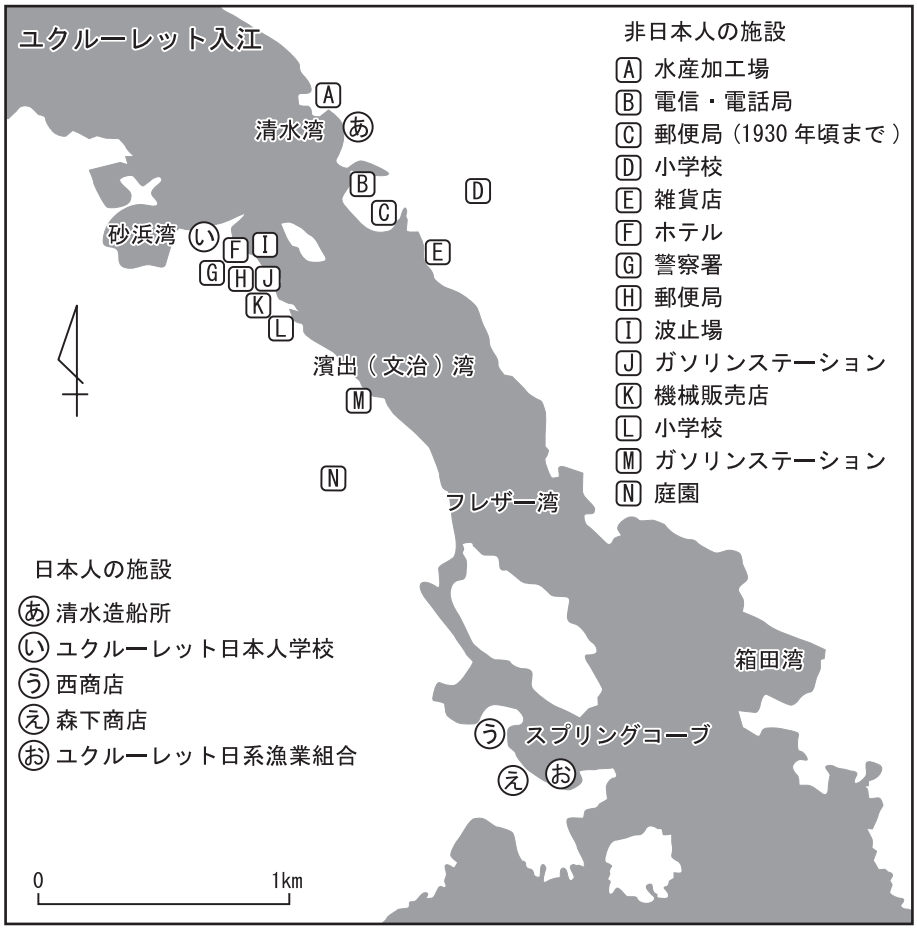
また、スティーブストンからユクルーレットへの移住には、漁業者以外も少なくなかった。そのなかで重要なのは、和歌山県東牟婁郡新宮町（現在の新宮市）出身の清水久蔵親子と、縁戚の同郡下里村（現在の那智勝浦町）の湊杢兵という船大工たちであった。スティーブストンのようにフレーザー川を遡上するサケを刺網漁業で獲るのならば、それは簡易な漁船でも可能であった。しかし、太平洋の外洋まで出漁し、そして刺網漁業と違って一本釣漁業によってスプリング種を釣獲するには、これまでと違った強靱な動力漁船が必要だった。船大工である彼らの移住によって、ユクルーレットへの日本人漁業者が追従したのである。

その後、100 人以上が当地域への移住を希望したものの、カナダ政府は漁業権（ライセンス）を制限した。スティーブストンでの日本人漁業者はバンクーバー島西岸へ移住した場合、各集落によって漁業権の発行数が定められたのである。すなわち、漁場の最も近くにフィヨルドの良港を有するユクルーレットでは 60 世帯、その北に位置するトフィーノでは 20 世帯、バークレー海峡を挟んだバムフィールドでは 10 世帯しか漁業が営めな

かったのである（第 1 図）。トフィーノとバムフィールドは北大平洋航路の寄港地であり、後者には海底ケーブル基地も設置されていた。そのような重要地でもあるため、日本人漁業者の移住は避けられたのであろう[24)]。

ユクルーレットでは、フィヨルドによる幅 200 ～ 300 メートルの細長い入江が北西方向へ約 5 キロほど湾入している。最初に移り住んだ上山又吉が居住地に選択したのは入江北東岸で、行政区としてはポート・アルビオンにあたる。ここは砂礫海岸からなり、漁船の係留に適していた。それだけではなく、上流のマッケンジー湖から流出する河川を活用した製材所の建設計画が頓挫し、中国人労働者用の住居が放置されていたのである。そこに、清水親子が移り住み、やがてここは清水湾（Simizu Bay）と呼ばれるようになった（第 2 図）。

彼らを追ったスティーブストンからの移住者は、他の 4 ヶ所の小さな入江に住みついた。それらは自然地名、先駆者や先住者の名前によって入江西岸では北から砂浜湾、濱出（文



第 2 図　ユクルーレットにおける主要施設と日本人居住地
出所）聞き取り調査より作成。

治）湾とフレーザー湾、入江東岸の南端部は箱田湾と名付けられた。濱出湾とは三尾村出身の濱出文治、フレーザー湾とは庭園を営んでいたジョージ・フレーザー（George Fraser）[25] から命名された。親日家のフレーザーは、所有地の一部を移住者へ提供したのである。西岸の３集落には、先駆者・上山又吉のようにスティーブストンで最多数の和歌山県、とくに三尾村出身者が多かった。ただし、入江東岸の清水湾では清水親子の地縁関係から、東牟婁郡をはじめとする三尾村以外の出身者が多かった（第１表）。

とくに、福岡県糟屋郡多々良村（現在の福岡市東区）出身の箱田直次の住む箱田湾は、三尾村出身者が皆無であった（第１表）。彼は、カナダ太平洋鉄道への鉄道契約移民の１人であった。２名の静岡県出身者も同様であり、彼らは契約満了後にサケ缶詰産業へと転出してきたのであろう。ただし、最大の日本人漁業者の集住地であるスティーブストンでは従事できず、バンクーバー島西岸に活路を見出したと考える[26]。

つまり、すでに居住環境が整っていた入江北東岸には先駆者が居住し、三尾村出身者は親日家の好意もあり対岸の西岸に居を構えた。そして、鉄道契約移民の転業などによる後発の日本人は、集落の縁辺にあたる東岸南端に集住したのである。

Ⅲ. 日本人による漁業組合の設立

前述したように、スティーブストンから日本人が移住した当初、ユクルーレットにはサケ缶詰工場は存在しなかった。そこで彼らは、漁獲したサケ類を日本人の仲買人に販売しなければならなかった。その代表的な業者はハウ・サウンド社であり、愛媛県南宇和郡東外海村（現在の愛媛県愛南町）出身の福山千吉と静岡県安部郡清水町（現在の静岡市清水区）出身の杉山岩吉による共同経営であった[27]。しかしながら、彼らへの仲介料を払うと、ユクルーレットに移った漁業者にはあまり利益がもたらされなかった。このような状況を嘆いた前川勘三は、1924 年にユクルーレット日系漁業組合を設立し、自ら販路を確保することを試みた。スティーブストンをはじめ、各地のサケ缶詰工場で重宝されたサケ類はサカイ種（紅鮭）であった。それに対し、バンクーバー島西岸で釣獲されるスプリング種は脂分が多いため、缶詰には不適とされていた。そこで前川らは、このスプリング種をカナダではなくアメリカのシアトルへ運搬・販売し、ドイツ向けの燻製に加工される販路を開いたのである。

ユクルーレットに続いて、トフィーノにも日系漁業組合が設立された。ただし、バムフィールドでは日本人漁家は 10 世帯しかなかったので、彼らはユクルーレットへ水揚し、そこから共同でシアトルへスプリング種が出荷された[28]。新しい流通販路を探求した前川勘蔵を中心とする日系漁業組合の活動は、従来のサケ缶詰産業とは異なってカナダ資本から独立したものになった。このようなバンクーバー島西岸における日本人漁業史は、カナダ漁業史において特筆されるべきである。

ユクルーレット日系漁業組合の事務所は、出漁の利便性からスプリング・コーブと呼ばれるユクルーレットの湾口部に設置された（第２図）。ただし、事務所は陸上に設置することが許されず、スカウと呼ばれる海上に浮かべたものであった。それは 1929 年にバンクーバーで建造され、船長 65.4 ft・船幅

第1表　ユクルーレットにおける日系漁民の出身地と漁業ライセンスの移動

1926年			1941年		移動型	備考
湾No	氏名	出身地	氏名	出身地		
清水1	上山又吉	三尾村	上山S	三尾村	B-1	
清水2	清水久六	東牟婁郡新宮町	清水久六	東牟婁郡新宮町	A	久蔵の二男
清水3	湊　杢平	東牟婁郡下里村	Y・T	三尾村	B-2	Y・Tは砂浜ベイに居住
清水4	U・K	有田郡田栖川村栖原	O・M	三尾村	C-3	O・Mはフレザーベイに居住
清水5	M・Iw	三尾村	M・Ij	三尾村	B-2	
清水6	M・M	三尾村	S・K	三尾村	C-1	
清水7	N・I	三尾村	N・S	三尾村	B-1	
清水8	T・K	三尾村	—	—	D	開戦のため譲与不可、資料では比井崎村出身
清水10	Y・I	三尾村	Y・I	三尾村	A	
清水9	T・K	西牟婁郡串本町	T・K	西牟婁郡串本町	A	
清水11	—	—	N・T	三尾村	D	義勇兵のためのライセンス獲得、フレザー3：N・Tの長男
濱出1	濱出R	三尾村	濱出R	三尾村	A	
濱出2	濱出T	三尾村	K・B	三尾村	C-1	
濱出3	濱出J	三尾村	K・E	三尾村	C-1	K・EはK・Fの実兄
濱出4	濱出Y	三尾村	K・F	三尾村	C-1	K・FはK・Eの実弟
濱出5	U・F	三尾村	U・F	三尾村	A	資料では比井崎村出身
濱出6	U・Z	三尾村	N・M	比井崎村阿尾浦	C-2	
濱出7	M・Y	比井崎村	M・T	比井崎村	B-1	
濱出8	N・J	東牟婁郡西向村高池	U・Z	三尾村	C-3	
濱出9	I・Y	三重県志摩郡越賀村	I・K	三重県志摩郡越賀村	B-1	
砂浜1	前川勘蔵	東牟婁郡西向村古田	前川佐一郎	東牟婁郡西向村古田	B-1	前川勘蔵は初代漁業組合長
砂浜2	K・Tz	三尾村	K・To	三尾村	B-1	
砂浜3	S・S	三尾村	S・H	三尾村	B-1	
砂浜4	T・I	三尾村	T・I	三尾村	A	
砂浜6	H・Y	三尾村	H・H	三尾村	B-1	
砂浜7	N・T	三尾村	M・N	三尾村	C-1	
砂浜8	H・C	三尾村	M・Y	三尾村	C-1	
砂浜9	Y・I	三尾村	Y・T	三尾村	B-1	
砂浜5	M・K	熊本県	K・K	三尾村	C-4	

第1表（続き）

1926年			1941年		移動型	備考
湾No	氏名	出身地	氏名	出身地		
フレザー1	I・Mo	三尾村	I・Ma	三尾村	B-1	I・SはI・Moの実弟
フレザー2	I・S	三尾村	M・N	三尾村	B-1	I・MoはI・Sの実兄、M・NはM家へ養子
フレザー3	N・T	三尾村	N・Y	三尾村	B-1	
フレザー4	Y・K	三尾村	N・S	三尾村	C-1	N・SはN・Tの三男
フレザー5	O・Tm	三尾村	O・To	三尾村	B-1	
フレザー6	S・K	三尾村	S・S	三尾村	B-1	S・SはS・Yの実兄
フレザー7	Y・Y	三尾村	I・S	三尾村	B-2	
フレザー8	I・G	三尾村	I・T	三尾村	B-1	
フレザー9	K・T	三尾村	K・T	三尾村	A	
フレザー10	H・U	三尾村	H・K	三尾村	B-1	
フレザー11	O・F	東牟婁郡西向村高池	S・Y	三尾村	C-3	S・YはS・Sの実弟
箱田1	箱田直次	福岡県糟尾郡多々良村土井	箱田直次	福岡県糟尾郡多々良村土井	A	
箱田2	M・K	静岡県安部郡不二見村	M・K	静岡県安部郡不二見村	A	
箱田3	M・S	広島県御調郡向島西村	Y・G	広島県御調郡向島西村	C-1	
箱田4	M・S	静岡県安部郡三保村折戸	Y・N	広島県御調郡向島西村	C-4	Y・GとY・Nは従兄弟
箱田5	T・K	海草郡西脇野村	T・S	海草郡西脇野村	B-1	
箱田6	W・T	広島県	W・T	広島県	A	
箱田7	N・O	比井崎村阿尾浦	N・T	比井崎村阿尾浦	B-1	
箱田8	T・T	比井崎村	T・I	比井崎村	B-1	
箱田9	O・T	比井崎村	O・T	比井崎村	A	
箱田10	M・K	比井崎村阿尾浦	M・K	比井崎村阿尾浦	A	
スプリング1	清水藤四郎	東牟婁郡新宮町	清水籐四郎	東牟婁郡新宮町	A	清水久蔵の長男

注1：県名のないものは和歌山県、郡名のないものは日高郡

注2：漁業権の移動形態

移動なし　A　血縁関係　親子　B-1　その他　B-2

地縁関係　出身地が同村　C-1　出身地が同郡　C-2　出身地が同県　C-3　出身地が他県　C-4

その他　D

出所）『加奈陀在留日本人名録』1926、『在加奈陀邦人々名録』1941．ならびに聞き取り調査より作成。

第 2 表　ユクルーレットにおけるおもな日本人所有の船舶

船主	船名	建造年	船長	船幅	トン数	造船地（造船所）	備考
Ucluelet Fishing Co. Ltd.	W.C.F. No. 1	1929	65.4	32.1	68	バンクーバー	海上組合施設
Ucluelet Fishing Co. Ltd.	Loyal No. 1	1928	59.0	15.7	30	バンクーバー（久岡造船所）	組合運搬船
Ucluelet Fishing Co. Ltd.	Loyal No. 2	1928	64.1	17.4	45	バンクーバー（Menchion 造船所）	組合運搬船
Ucluelet Fishing Co. Ltd.	Epco	1930	34.2	9.7	8	ウエスト・バンクーバー	組合雑用船
Kiuroku Shimizu	Miss Ucluelet	1930	31.5	8.4	6	ユークレット（清水造船所）	一本釣漁船
Tsunetaro Koyama	Reagle I	1938	36.0	11.6	10	スティーブソン	一本釣漁船

注 1：船長・船幅の単位は feet
出所）Department of Transport *"List of Vessels on the Registry Books of the Dominion of the CANADA"* 1942 より作成。

第 3 図　ユクルーレット日系漁業組合の施設と船舶
出所）「前川家コレクション」より掲載。

32.1 ft・重量 68 t の海上施設であった（第 2 表）。当時のスプリング・コーブを写した第 3 図には、シアトルへスプリング種を運搬する 2 隻の大型運搬船と小型船が写っている。1928 年にバンクーバーの久岡造船所[29] で建造された右側の Loyal No. 1 は、59 ft・15.7 ft・30 t の運搬船である。元来、久岡は船大工ではなかったため、この運搬船は優れたものではなく、すぐにバンクーバーのカナダ系造船所で Loyal No. 2 が建造された。No. 1 に比べてひと回り大きい No. 2 は、64.1 ft・17.4 ft・45 t からなる。Loyal No. 1・2 の左横に写る小型船・EPCO は 1930 年に作られた組合の雑用船である。なお、スプリング種を漁獲対象とした一本釣漁船は、約 30 ft・10 ft・7 t であった。棹の先端には鈴がつけられ、サケが釣針にかかると鳴るように工夫されていた[30]。

Ⅳ. 居住者構成の変化

移住初期の 1927 年当時、ユクルーレットの人口はおよそ 200 人であった。日本人以外では漁業者が 9 人、農場経営者は各 9 人で、

第3表　ユクルーレットにおける職業構成の変化

		1927年（人口200人）				1941年（人口540人）			
個人	日本人	造船業	1	雑貨店	2	漁業	51	雑貨店	2
						簿記	1	農業	2※
	日本人以外	漁業	9	事務員	1	漁業	35	造園業	1
		農場経営者	9	給油所員	1	水産加工会社経営者	2	鉱山経営者	1
		農業	6	保線工	1	水産加工者監督	3	道路工（親方・監督）	1
		公務員	3	店員	1	燈台員	1	大工	1
		パン屋	2	ハウスキーパー	1	農業	9	管理人	1
		雑貨店	2	教員	1	教員	5	トラック運転手	1
		大工	1	造園業	1	公務員	4	セールスマン	1
				機械工	1	ハウスキーパー	4	雑貨店	1
						機械工	3	その他の労働者	6
						隠居者・年金生活者	3	不明	1
						医者・医療技師・看護婦	2		
事業所	日本人	ウエストコースト水産会社				ユクルーレット漁業組合			
	日本人以外	国役所				バンフィールド水産会社			
		州役所				インペリアル石油会社			
		カナディアン・フィッシュ							
		ユクルーレット・エンジニアリング・ワーク							

※農業は4人記載されているが、誤記による重複が2名ある

出所）*BC Directory* より作成。

そこでの雇用者は6人を数えた。湾名になっているジョージ・フレーザーのように、庭園業を営むものもいた。その他に機械工、大工、事務員や雑貨店などのほか、事務所としてBC州の出先機関、そしていくつかの機械会社もみられた[31)]。職業構成から見る限り、ユクルーレットは半農半漁村であった。

それに対し、1941年には人口が約540人に増えている。日本人の職業では漁業が51名、組合の簿記担当が1名、店舗経営者が2名みられる。一方、日本人以外では漁業が35名と突出している。日本人漁業者の移住によって、スカンジナビア系を中心とするカナダ人も同業を営み始めたのである。このことによって、当地での漁業種類にも変化が生じるようになった。ユクルーレットの位置する第3漁区において、1919～29年の漁業種類の変化をみると、一本釣漁業の経営体数と漁獲高が上昇している[32)]。その他、日本人以外では水産加工業、バムフィールド水産会社の経営者や監督者などの漁業関係者もみられる。また、ユクルーレットにもサケ缶詰工場が設置され、そこに従事する白人漁業者も移り住むようになった。漁業者の増加にともない、海上ガススタンドを営むインペリアル石油会社も開業した。多数の漁船の操業によって、給油関係の施設事業所も現れたのである。一方、1927年当時に多かった農業に関しては、わずか9人とフレーザーの造園業1名を数えるだけである。日本人の移住によって、ユクルーレットは漁村へとその姿を変えたのである。

なお、ユクルーレットの日本人は漁業者だけではない。漁業組合の組織が整うと、漁業

第 4 表　ユクルーレットにおける漁業権未所有者の職業と出身地

1926 年				
居住地	氏名	職業	出身地	その他
スプリング	N・S	商店経営	三尾村	
スプリング	M・T	商店経営	松原村	
スプリング	M・U	N 商店店員	比井崎村	
清水	清水久蔵	豆腐製造	東牟婁郡新宮町	
清水	M・T	魚仲買人	三尾村	
組合	K・K	漁業組合幹事	佐賀県神崎郡蓮池村見嶋	
組合	F・I	大工	東牟婁郡下里村下里	湊杢平と血縁関係
1941 年				
居住地	氏名	職業	出身地	その他
スプリング	N・S	商店経営	三尾村	
スプリング	M・T	商店経営	松原村	
スプリング	M・U	N 商店店員	比井崎村	
濱出	A・S	運搬船船長	比井崎村阿尾浦	
濱出	I・M	運搬船乗組員	三重県志摩郡越賀村	濱出 9：I・Y の二男
箱田	箱田 Y	運搬船乗組員	福岡県糟屋郡多々良村土井	箱田 1：箱田直次の長男
組合	I・S	運搬船機関士	静岡県賀茂郡松崎町松崎	
砂浜	S・T	漁業組合幹事	御坊町	
組合	M・K	漁業組合調理師	熊本県飽託郡池上村高橋	
組合	M・S	漁業組合調理師	三尾村	M・K の後任
組合	O・S	大工	鹿児島県	F・I の後任
学校	S・T	日本人学校教師	長崎県	妻も教師

県名のないものは和歌山県、郡名のないものは日高郡
出所）『加奈陀在留日本人名録』1926、『在加奈陀邦人々名録』1941．ならびに聞き取り調査より作成。

関係以外の人たちもここに移り住むようになった。1926 年には漁業組合のあるスプリング・コーブに 2 店舗があった。商店の経営者と従業員は三尾、松原と比井崎の和歌山県日高郡出身者であった。組合には、簿記担当者や大工も雇用されていた。前者は佐賀県出身者、後者は東牟婁郡下里村の出身で、先駆者の 1 人である湊杢兵と血縁関係にあった。また、清水湾では船大工の清水久蔵が豆腐製造業も営むようになった。このように、漁業以外の職業においては三尾村以外の出身者が携わることが多かったのである（第 4 表）。

また、運搬船 Loyal No. 1・No. 2 にかかわる人たちもいた。1941 年当時、濱出湾に運搬船の船長と乗組員、箱田湾に乗組員、そして組合施設に在留する機関士もいた[33)]。彼らも三尾村出身者ではなく、比井崎村出身者の船長を除けば乗組員 2 人は三重県と福岡県、そして機関士の静岡県のように、和歌山県以外の出身者がほとんどであった。組合幹事も和歌山県であるものの御坊町出身者であり、調理士についても 1 人は三尾であるが、もう 1 人は熊本県出身者である。後に交代した大工も、鹿児島県出身者である。このように、漁業以外でユクルーレット日系漁業組合を支えていたのは、三尾村以外の出身者であった。

彼らは、さまざまなネットワークによって

ユクルーレットに集まってきた。それらを少しひもとくと、何人かの静岡・熊本・鹿児島県出身がみられる。彼らは、箱田直次のように渡加初期にはカナダ太平洋鉄道の鉄道契約移民、またはその関係者であった[34)]。三重県の志摩半島南岸では、アメリカへの移住者を輩出していたため、その関係性がうかがえる[35)]。

とりわけ興味深いのは、1926年に日本語学校の開設によって着任した教員夫婦である。二世の誕生によって、各地の日本人集住地には同邦によって日本語学校が設立された。それはユクルーレットにも1926年に設立され、1940年には42名の児童と教員2名が在籍していた[36)]。その任には長崎県出身の篠崎虎之助・ミエが選ばれた。この雇用のネットワークは、バンクーバーへと広がっていた。同地の日本人集住地•パウエル街には、徳島県板野郡北島村江尻（現在の徳島県北島町）出身の新見虎五郎の営む新見薬店があった。そこにはユクルーレット日系漁業組合の出張事務所があり、同店の紹介で彼らは着任したのである[37)]。なお、日本語学校の対岸にある清水湾からの通学には、前述した商店の運搬船が使用されていた[38)]。

V．漁業ライセンスの移動

1930年代に入ると、世界恐慌によりユクルーレットも不景気に襲われた。そのため、日本へと帰国するものもみられた。その際、漁業ライセンスは同胞に譲与された。ただし、「女人天国」と称されたユクルーレット[39)]には、スティーブストンをはじめ各地から当地への移住希望者が多かった。

1926年から41年にかけて漁業権の移動は、次の4パターンに分かれる（第1表）。第1のAタイプは移動のなかったもので、13件を数える。第2に血縁関係への移動にあたるBタイプ（22件）があり、これには親から子に譲与される場合と、他の血縁者へのものとに分かれる。前川勘三から佐一郎のように、前者の親子間での継承が最も多く、全体の6割を占めていた。これは、渡加後に約20年が過ぎ、一世の初期移民はすでに高齢になっていたためである。次に、地縁関係者に譲られるCタイプ（14件）がある。それには、出身地によって同村・同郡・同県・他県の4つに分類できる。ユクルーレットでは、三尾村出身者が同村出身者に漁業権を譲るC1タイプが多かった。その他、特殊な例として清水湾・11があげられる。カナダ国籍を取得した彼は、第一次世界大戦時に義勇兵として参戦し、この業績による特例として当地で51番目の漁業権が認められたのである[40)]。

このような移民史を築いたものの、漁業組合を中心とするユクルーレットの日本人社会は、太平洋戦争の勃発によって1942年12月にその幕を下ろした。カナダ政府によって日本人は海岸部から100マイル内陸部へ強制移動させられたのである[41)]。

VI．おわりに

1910年代、スティーブストンではバンクーバー島西岸への移住を促すいくつかの要因が発生した。ひとつは漁船の動力化と、それにともなう沖合の新たな漁場の発見である。もうひとつは、カナダ太平洋鉄道の工事によるサケ漁獲量の減少と火災である。このような経済的・地域的な変化を、日本人は見逃さなかった。そのとき、漁場の発見をはじめとす

る漁撈を担う三尾村出身者、それを組織する和歌山県南東部出身者、そして他地域出身者によって相互補完的に新しい移住漁村が形成されたのである。さらに、日本学校教師、大工、組合調理師や運搬船船員など、非漁業者の多くは三尾村出身者ではなかった。特に、初代組合長・前川勘三をはじめとする指導者層は東牟婁郡出身者が多かったことは看過できない[42)]。つまり、ユクルーレットでは湾ごとの居住地の住み分けだけでなく、出身地による社会的分業がみられたのである。

かかる点から再検討すると、三尾村出身者ばかり注目されてきたカナダ日本人漁業移民史を、改めて考察する必要がある。また、鉄道契約移民をはじめ、非漁村出身者の存在も見逃せない。つまり、総合的なアプローチからカナダ日本人「水産移民史」を構築せねばならないのである。

〔付記〕本稿は 2001 年から開始したカナダ日本人漁業史研究において、継続的に行ってきたバンクーバー島西岸の調査をまとめたものです。バンクーバーにおいて数え切れないご助言を頂いた BC 州和歌山県人会会長の田並謙次氏、前川・ラリー・佐一郎氏ならびに和歌山県串本市における前川氏の実妹・山口静代様の御霊前に心からお礼申し上げます。本稿をまとめるにあたって、UBC アジア図書館やカナダ日系博物館など、お世話になったカナダの皆様にお礼申し上げます。

本稿は、2015-2019 年度科学研究費基盤研究（C）「カナダ契約移民の輩出と渡航後の地域的展開をめぐる歴史地理学的研究」（代表・河原典史）、2013-2017 年度科学研究費基盤研究（A）「環太平洋における在外日本人の移動と生業」（代表・米山裕）の成果の一部です。

注

1） 例えば、① Marlatt, D. and Minden, R. (2001) *Steveston*. Ronsdale Press. ② McNulty, B. (2001) *Steveston A Community History*. Bill McNulty. 近年の北米における研究動向は、以下の拙稿を参照。河原典史（2018）「カナダ日本人漁業史研究をめぐる展望と課題―近年における北米の成果を中心に―」、立命館文学 656、121-135。

2） 新保　満（1996）『カナダ移民排斥史―日本の漁業移民―』、未来社。

3） 佐々木敏二（1999）『日本人カナダ移民史』、不二出版。

4） 山田千香子（2000）『カナダ日系社会の文化変容―「海を渡った日本の村」三世代の変遷―』、御茶の水書房。

5） 例えば、① Yesaki, M. (1998) *Steveston Cannery Row An Illustrated History*. Mitsuo Yesaki. ② Yesaki, M. (2002) *A Historical Guide to the Steveston Waterfront*. Mitsuo Yesaki. ③ Yesaki, M. (2003) *Steveston A Japanese village on the British Columbia coast*. Peninsula Pub. ④ Yesaki, M. (2005) *Watari-dori (Birds of Passage)*. Peninsula Pub. Co.

6） 河原典史（2013）「カナダ・フレーザー川における日本人漁業者の漁場利用―日記と視察報告書から―」、国際常民文化研究叢書、1、185-193。

7） 河原典史（2008）「『BC 州サケ缶詰工場地図集成』にみるサケ缶詰産業と日本人漁業者」、立命館言語文化研究、19(4)、246-250。

8） 河原典史（2017）「サケを運んだ薩摩人―カナダのサケ缶詰工場における日本人移民史―」、立命館文学、650、123-138。

9） 近年のカナダでは、元来ファースト・ネーションが命名した地名を正式なものとして使用している。本稿では、従来の名称の方がわかりやすいので、併記とした。

10） ①河原典史（2012）「20 世紀初頭のカナダ西岸における捕鯨業と日本人移民」、地域漁業研究、52(2)、65-83。②河原典史（2014）「カナダへ雄飛した臼杵のひと―小坂家の移住史―」、臼杵史談、104、59-77。

11） 河原典史（2013）「1920 年頃のカナダ・バンクーバー島西岸におけるニシン漁業の漁場利用―調査報告書と古写真から―」、国際常民文化研究叢書、1、173-184。

12） 河原典史（2015）「太平洋をめぐるニシンと日本人―第二次大戦以前におけるカナダ西岸の塩ニシン製造業―」、米山　裕・河原典史編『日本人の国際移動と太平洋世界―日系移民の近現代史―』、文理閣、146-162。

13） 河原典史（2007）「カナダ・バンクーバー島西岸への日本人漁業者の二次的移住―クレヨコット・トフィーノ、バムフィールドを中心に―」、米山　裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動　在外日本人・移民の近現代史』、

人文書院、147-172。

14）　前川家関係者への聞き取り調査と同家所蔵資料の縦覧によって、筆者は古写真集とその解題を刊行した。河原典史編（2013）『カナダ日本人漁業移民の見た風景―前川家「古写真」コレクション―』、三人社。

15）　河原典史（2011）「『前川家コレクション』にみる女性と子供たち―カナダ・バンクーバー島西岸の日本人―」、京都民俗、28、111-130。

16）　小林貞二（1935）『須知武士道漁者慈善団体三十五年史』、佐々木敏二・権並恒治（1995）『カナダ移民史資料　第4巻』、不二出版。

17）　水上家屋のサケ缶詰工場施設は、缶詰製造所と雇用者の住宅に分かれていた。後者は、日本人・中国人・ファーストネーション用に分棟されていた。前掲7）。

18）『大陸日報』は、1907年6月22日にバンクーバーで創刊された日本語新聞である。当時のカナダにおける日本語新聞の発刊ついては、以下の文献に詳しい。新保　満・田村紀雄・白水繁彦（1991）『カナダの日本語新聞―民族移動の社会史―』、PMC出版、25-80頁。新保　満・田村紀雄（1983）「戦前カナダの日系紙――世の新聞と二世の新聞（上）―」、東京経大学会誌、133、317-343。新保　満・田村紀雄（1984）「戦前カナダの日系紙――世の新聞と二世の新聞（中）―」、東京経大学会誌、135、99-142。

19）　前掲16）。

20）　河原典史（2005）「第二次世界大戦以前のカナダ西岸における日系造船業の展開―和歌山県出身の船大工のライフヒストリーから―」、立命館言語文化研究、17(1)、59-74。

21）　前掲16）。

22）　1882（明治15）年に生まれた前川勘蔵は、1899（明治32）年にカナダへ渡った。渡加当初、彼はフレーザー川河口の中州にあたるルル島の牧場で働いた後、フレーザー川北流域のバンクーバー・キャナリーに勤めた。ここには6名の和歌山県出身者をはじめ、およそ30世帯の日本人がサケ缶詰産業に従事していた。男性は刺網漁業によるサケ漁獲、女性はそれを原料とする缶詰作業を行っていた。前川家の渡加やその後の活動については、前掲14）に収めた以下の記録による。前川・ラリー・佐一郎（2013）「無名の勇士」、河原典史編『カナダ日本人漁業移民の見た風景―前川家「古写真」コレクション―』、三人社、161-171。

23）　前掲22）。【資料3】も同じ。

24）　前掲22）。

25）　Lee, A. and Switzer, G. (2004) *George Fraser's Rhodo Heaven*, Fraser Day July.

26）　筆者は、鉄道契約移民として渡航した鹿児島県南部出身者が契約満了後にサケ缶詰工場の漁業者に転業した事例を紹介した。三尾出身者の多いスティーブストンではなく、彼らは南方のカナ水路の工場に従事した。前掲8）。なお、東京移民合資会社による鉄道契約移民については、次の拙稿に詳しい。河原典史（2014）「カナダ・ロジャーズ峠における雪崩災害と日本人労働者―忘れられたカナダ日本人移民史―」、吉越昭久編『災害の地理学』、文理閣、193-210。

27）『本邦実業者調』（1937）によれば、1917（大正6）に創業されたHowe Sound Fisheriesは資本金10万ドル、従業員100名、そのうち白人が60を占める水産加工業社であった。同資料については、高嶋雅明（2006）「『海外日本実業者の調査』解説」、清文堂、1-7に詳しい。また、筆者は、同資料を活用してカナダにおける日本人水産加工業者について検討した。河原典史（2016）「20世紀初頭のカナダ西岸における塩ニシン製造業の歴史地理学的検討―是永・嘉祥家を中心に―」、立命館文学645、119-136。

28）　前掲22）。

29）　久岡造船所の経営者である久岡文治は、広島県比婆郡帝釈村宇山（現在の広島県庄原市）出身である。彼の履歴に関しては、前掲19）を参照のこと。

30）　河原典史（2011）「水産報告書にみる20世紀初頭の北米西岸のサケ缶詰産業」、国際常民文化研究機構年報、2、88-99。

31）　このような職業構成について、日本語のみの資料を使ってきた先行研究では都市部に住む日本人の経営者しかわからなかった。そこで、アルファベット順に掲載された集落ごとに職業も併記された居住者が記載された*"BC Directory"*が活用される。ただし、この資料は1920年代以前まで日本人は"Chinese"と誤記されていたり、"Oriental"と一括されていたり、その職業が不明となっていたりする欠点もある。詳細は、河原典史（2014）「カナダ日本人移民史研究における住所氏名録と火災保険図の歴史地理学的活用―ライフヒストリー研究への試的アプローチ―」、移民研究年報、20、17-37。

32）　*Census of Industry Fisheries Statistics" 1919,* "*Fisheries Statistics of CANADA" 1929*

33）　箱田湾に住んでいる乗組員は、箱田直嗣の長男である。

34）　前掲26）。

35）　志摩町史編纂委員会編（2004）『志摩町史改訂版』、志摩町教育委員会。

36）　佐藤伝編（1953）『加奈陀日本語学校教育会史―1923-42年』、加奈陀日本語学校教育会整理委員会、35-39頁。

37） 福井県遠敷郡遠敷村（現在の福井県小浜市）出身の兼田熊三・ソノ夫妻の次女ルイは、新見虎五郎に嫁いだ。彼女の妹である三女ミエは1906（明治 39）年「丙午」生まれであったため、いわゆる悪習によって婚期を逃すことを心配した両親は、生涯一人で生きていけるよう彼女に日本語、英語、書道やピアノなどの教育を施した。このような日本伝来の迷信を気に留めない教育者であった篠崎虎之助は、兼田ミエと結婚したのである。篠崎夫妻と新見夫妻をめぐるエピソードについては、前掲 15）に詳しい。

38） Takata, T. R. (1983) *Nikkei Legacy The Story of Japanese Canadians from Settlement to Today*. Toronto, New Canada Press.

39） 一本釣漁業の盛況によって、サケ缶詰工場をはじめ女性が漁業に関して補助的な労働をする必要のなかったユクルーレットについて、『大陸日報』が取材記事を掲載した。前掲 15）。その全文は、前掲 14）に収録されている。

40） 1902 年、すでに日本とイギリスは日英同盟を結んでいた。1914 年に勃発した第一次世界大戦では、イギリスの同盟国であったカナダも参戦した。そこで、カナダ日本人移民社会では参政権の確保などの地位向上のため、戦場へ同胞を送出するようになった。工藤美代子（1983）『黄色い兵士達―第一次世界大戦日系カナダ義勇兵の記録―』、恒文社。

41） ユクルーレットからの強制的移動当日の様子については、前掲 22）に詳しい。

42） 太田川右岸に位置する下里の対岸の八尺鏡野には、伊達惟徳軒によって私塾峨洋楼、また彼の門人・佐藤百樹によって懸泉堂が創設され、海外渡航を促すような先進的な教育がなされていた。なお、南接する浦神にも山口俊道による家塾が開かれていた。それらに関わって、下里町海外渡航者後援会も設立され、海外渡航者の便宜を図っていた。和歌山県（1957）『和歌山県移民史』、和歌山県、204–207 頁。